

## もくじ

ごあいさつ	中国地区会会長 佐藤 園	1
第35回日本家庭科教育学会中国地区会「役員会」(総会)報告		2
研究発表要旨		6
研究室だより	鳥取大学 福田恵子	14
学校現場から	山口大学教育学部附属山口小学校 古庄 又	15
日本家庭科教育学会本部だより	中国地区会代表者 西 敦子	16
2016年度「研究発表会および講演会のご案内」	鳥取大学 福田恵子	17
事務局だより	岡山大学 篠原陽子	18

## ごあいさつ

中国地区会会長 佐藤 園 (岡山大学教育学部)

平成27年8月に山口大学で開催されました中国地区で、地区会長を務めさせて頂くことになりました岡山大学の佐藤です。二年間、どうぞよろしくお願い致します。

山口大学の西先生が「本部だより」で報告されていますように、平成27年12月に東京学芸大学で「日本家庭科教育学会2015(平成27)年度例会」が開催されました。

会員の研究発表会の後、講演・指定討論会が行われ、文部科学省初等中等教育局視学官望月昌代先生から「教育改革と家庭科—いま家庭科教育に求められているもの—」と題する基調講演がありました。その主たる内容は、現在、文部科学省で進められている次期学習指導要領の改訂に向けての教育改革の方向性で、今後は具体的な教科等別・学校種別の検討に入っていくということでした。先生方もご存じのように、今回の教育改革において、今後の家庭科のあり方を考えていくための重要な検討課題としては、高等学校「公共」の新設と全学校教育段階に導入されるアクティブラーニングがあります。

中国地区会では、前地区会長の多々納先生のご提案で、次期学習指導要領の改訂に先がけ、アクティブラーニングの共同研究を推進することになりました。既に、共同研究への参加は締め切られましたが、研究成果の出版に向けて、島根大学の丸橋先生が頑張っています。

周知のように、アクティブラーニングは、家庭科では従来から当たり前のように取り組まれてきた課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びです。しかし、教科としての家庭科におけるアクティブラーニングでは、家庭科でしか学べない質の高い知識・技術に加え、家庭生活に関する科学的な認識を子どもたちが獲得することができなければ、単なる形骸化された活動主義の学習に終始することになります。家庭科におけるアクティブラーニングについて探求していくために、8月に鳥取大学で開かれる中国地区会では、福田先生のご尽力により、京都大学の松下佳代先生をお迎えして、基調講演・アクティブラーニングに関する実践報告・ディスカッションからなる講演会を開催することになりました。この会をきっかけとして、アクティブラーニングの理念について共有し、日々の家庭科授業実践に取り組み、その成果を中国地区会から全国に発信することができれば、と考えております。中国5県からの多くの先生に、地区会に参加していただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

### 第35回日本家庭科教育学会中国地区会「役員会」(総会)報告

平成27年度の日本家庭科教育学会中国地区会の研究発表および講演会は、平成27年8月24日に、山口大学教育学部において開催された。

#### 総会次第

1 開会の辞	入江 和夫	(2) 協議事項	
2 会長挨拶	多々納道子	①役員改選及び新体制について	多々納道子
3 会場校挨拶	西 敦子	②平成27年度事業計画	福田恵子
4 議長選出	鈴木 明子	③平成27年度会計予算	丸橋静香
5 議事		④共同研究について	多々納道子
(1) 報告事項		⑤ その他	多々納道子
①平成26年度庶務報告	福田恵子	6 次期会場校(鳥取大学)挨拶	福田恵子
②平成26年度会計報告	丸橋静香	7 閉会の辞	入江 和夫
③平成26年度会計監査報告	西敦子・鳥井葉子		

#### [ 報告事項 ]

##### 1. 平成26年度 庶務報告

###### ① 地区会現況報告(平成26年8月末日 現在)

鳥取県4名 広島県54名 岡山県13名 島根県23名 山口県15名  
計109名 (平成25年8月末 102名)

###### ② 平成26年度事業報告(平成26年4月～平成27年3月)

平成26年4月 会報第34号発行

日本家庭科教育学会第57回大会案内(以下、全国大会とする)および中国地区会平成26年度事業についてのお知らせとお願いの送付

全国大会第1回実行委員会開催

平成26年6月 全国大会第2回実行委員会開催

日本家庭科教育学会中国地区会第34回研究発表会並びに講演会開催

(全国大会との共同開催, 岡山大学)

役員会開催(岡山大学)

平成26年7月 共同研究冊子送付

平成26年12月 平成26年度役員会資料等送付→1月まで意見聴取し、総会に代える  
(平成25年度庶務・会計報告, 平成26年度事業計画案および予算案)

平成27年3月 会報第35号発行

##### 2. 平成26年度 会計報告

\*一般会計(自:平成26年4月1日～至:平成27年3月31日)

<収入の部>

(単位 円)

費目	予算額	決算額	摘要
前年度繰越金	87,509	87,509	
地区会費	102,000	92,000	1,000円×92人分
本部からの交付金	60,210	60,210	
教大協からの補助金	0	0	
雑収入	10	39	預金利息
合計	249,729	239,758	

<支出の部>

(単位 円)

費 目	予算額	決算額	摘 要
総会費	0	0	
通信費	18,000	26,750	
事務用品費	3,000	6,095	
会議費	10,000	0	
印刷費	10,000	2,592	
雑費	2,000	0	
共同研究費(特別会計)	100,000	100,000	
予備費	106,729	0	
合計	249,729	135,437	

<次年度繰越金> 104,321 円

**\*特別会計 (自:平成26年4月1日~至:平成27年3月31日)**

<収入の部>

(単位:円)

事項	予算額	決算額	備考
前年度繰越金	705,899	705,899	
一般会計から繰入	100,000	100,000	
共同研究報告書売上金	65,000	63,965	売上1,000×61冊+報告書印税2,965円
利子	80	94	
地区特別交付金	0	161,986	第57回全国大会実行委員会黒字分
計	870,979	1,031,944	

<支出の部>

(単位:円)

事項	予算額	決算額	備考
共同研究報告書印刷費	226,800	227,448	買上費226,800円+印刷費振り込み手数料648円
通信費	15,000	12,609	
予備費	629,179	0	
計	870,979	240,057	

<次年度繰越金> 791,887 円

**3. 平成26年度 会計監査報告**

平成26年度の会計について、領収書、帳簿を照合して監査した結果、適正に処理されておりましたので、報告いたします。

平成27年 8月 22日  
 会計監査 : 西 敦子  
 会計監査 : 鳥井葉子

## [ 協 議 事 項 ]

### 1. 役員改選および新体制について

#### (1)平成 27・28 年度の役員選出結果

- ・広島県 中村喜久江 (福山平成大学)
- ・山口県 西 敦子 (山口大学)
- ・鳥取県 福田恵子 (鳥取大学)
- ・島根県 丸橋静香 (島根大学)
- ・岡山県 佐藤 園 (岡山大学)

#### (2)役割分担 (平成 27 年 8 月～平成 29 年 7 月)

役 職	所 属	氏 名
地区会長	岡山大学	佐藤 園
地区副会長	山口大学 (※) 鳥取大学	西 敦子 (※) 福田 恵子
会計監査	島根大学 福山平成大学	丸橋 静香 中村 喜久江
庶 務	岡山大学	篠原 陽子
会 計	岡山大学	篠原 陽子

(※は地区会代表者)

### 2. 平成 27 年度事業計画 (案) (自：平成 27 年 4 月 1 日～至：平成 28 年 3 月 31 日)

- 平成 27 年 6 月 日本家庭科教育学会第 58 回大会にて、共同研究報告書販売  
 平成 27 年 7 月 日本家庭科教育学会中国地区会第 35 回研究発表会並びに総会案内送付  
 (山口大学)
- 平成 27 年 8 月 役員会開催 (山口大学)  
 平成 27 年 8 月 日本家庭科教育学会中国地区会第 35 回研究発表会並びに総会 (山口大学)  
 平成 28 年 3 月 会報第 36 号発行

### 3. 平成 27 年度会計 予算 (案)

#### \*一般会計 (自：平成 27 年 4 月 1 日～至：平成 28 年 3 月 31 日)

<収入の部>

(単位 円)

費 目	26 年度決算額	予算	摘 要
前年度繰越金	87,509	104,321	
地区会費	92,000	109,000	1,000 円×109 人分
本部からの交付金	60,210	56,910	
教大協からの補助金	0	30,000	
雑収入	39	40	預金利息
合計	239,758	300,271	

< 支出の部 >

(単位 円)

費 目	26 年度決算額	予算額	摘 要
総会費	0	100,000	例年 70,000 円であったが、物価高騰等の理由により 30,000 円増額
通信費	26,750	20,000	
事務用品費	6,095	5,000	
会議費	0	10,000	
印刷費	2,592	10,000	会報 36 号
雑費	0	1000	
共同研究費（特別会計）	100,000	50,000	共同研究充実のため引き続き計上
予備費	0	104,271	
計	135,437	300,271	

\* 特別会計（自：平成 26 年 4 月 1 日～至：平成 27 年 3 月 31 日）

< 収入の部 >

(単位：円)

事 項	26 年度決算額	予算	備考
前年度繰越金	705,899	791,887	
共同研究費として一般会計から繰入	100,000	50,000	
共同研究報告書売上金	63,965	20,000	
利子	94	90	
地区特別交付金	161,986	0	第 57 回全国大会実行委員会黒字分
計	1,031,944	861,977	

< 支出の部 >

(単位：円)

事 項	26 年度決算額	予算額	摘 要
共同研究報告書出版費（買上げ）	227,448	0	
通信費	12,609	10,000	
予備費	0	851,977	
計	240,057	861,977	

4. 共同研究について

- 研究期間 . . . . . 平成 27 年度～29 年度
- 研究テーマ . . . . . 「アクティブラーニングを活かした家庭科の授業開発」
- 共同研究参加者の募集 . . . . . 平成 27 年 8 月～平成 27 年 12 月
- 原稿締め切り . . . . . 平成 29 年 1 月末
- 図書出版 . . . . . 平成 29 年 6 月末

5. その他 会報第 36 号に掲載予定の研究発表要旨について

# 日本家庭科教育学会 中国地区会

## 第 35 回 研究発表会・講演会

### 発表要旨

期 日 平成 27 年 8 月 22 日(土)  
場 所 山口大学教育学部 11 番教室

研究発表プログラム 13:40~14:40

1. 被服管理に関する生活的自立のための教育実践

—実践後の気づき、意識変化を中心に—

安田女子大学

田中由美子

2. 中国の学校教育における家庭科的教育の現状

鳥取大学地域学研究科(院生) ○董 婉綺

鳥取大学

福田 恵子

3. 小学校家庭科におけるアクティブラーニングを活用した選ぶ力の育成

島根大学大学院教育学研究科 ○植田 遥菜

島根大学教育学部附属小学校 竹吉 昭人

島根大学教育学部

多々納道子

4. 「比較」を通して実践力を育む小学校家庭科授業の実践

山口大学附属小学校

古庄 又

講 演 15:00~16:30

演 題 人をつなぐおもちゃ

講 師 <sup>た</sup>多 <sup>だ</sup>田 <sup>ち</sup>千 <sup>ひろ</sup>尋 氏

芸術教育研究所所長 東京おもちゃ美術館館長

### 《講師プロフィール》

日本の玩具・児童文化研究者、東京おもちゃ美術館館長。芸術教育研究所所長。文部科学省中学校学習指導要領解説技術・家庭科作成協力者、TBS ラジオ「全国こども電話相談室」回答者などを歴任。玩具を中心とした子どもと高齢者の遊び支援の一環として、「おもちゃインストラクター」「おもちゃコンサルタント」の養成にも力を注ぐ。乳幼児教育・子ども文化、高齢者福祉・世代間交流についても研究・実践している。

専門は児童文化論と高齢者福祉文化論、アクティビティケア論、早稲田大学では「福祉文化論」、お茶の水女子大学では「コミュニティ保育資源の活用」、明治大学では「NPOの経営学」などの教鞭をとる。2014年、「日本の社会企業化30人」にも選ばれた。

### 《事務局から》

大人も子どもも、大好きなおもちゃ。誰にでも、忘れられない思い出のおもちゃや、大切にしているおもちゃがあることでしょう。おもちゃには、たくさんの魅力があります。素材に触れる喜び、家族や人と繋がる喜び、地域や文化と繋がる喜び……。おもちゃを媒介に多彩な活動を続けてこられた多田さんのお話をうかがい、教師として、保育者として、地域文化の継承者として、家族として、人を豊かにするおもちゃの魅力を見つめ直すとともに、家庭科教育における保育分野について、改めて考えていきたいと思っております。東京おもちゃ美術館の開設と運営にまつわるお話が聴けることも、楽しみにしております。

## 被服管理に関する生活的自立のための教育実践 —実践後の気づき、意識変化を中心に—

安田女子大学 田中由美子

### 1 研究の背景と目的

若年層の生活的自立の乏しさが指摘され始めて久しい。自立行動を形成・定着する視点で家庭科教育のあり方を検討した兼信らは、「実践化を図る指導法の工夫」と「家庭における実践」の必要性を述べ、「自立の三要素」として「できる行動」「必要感」「行動意欲」を挙げた。これについて赤崎は、被服整理に関して、女子大学生の4割がこの三要素を持っていながら行動できていないことを明らかにし、「生活的自立の教育的課題」を「生活経験の場の準備」「自分を見つめ直し行動を相対化できる学習方法の取入れ」「主体的意思決定で行動する価値観形成を促す方法の発見」（筆者要約）としている。

これらもふまえ、筆者は“生活的自立を促すために必要な教育内容・教育方法”を「生活を振り返り、無意識を意識化（予測含む）することで、客観的見つめ直し（モニタリング）、気づき、内省を促し、主体的意思による行動（コントロール）の意義、及び楽しさを感じられる家庭での実践教材」ではないかと考えた。これらの学習活動を実現する教育方法として、メタ認知を包含した自己調整学習の5つの学習段階を援用した。これにより、高等学校家庭科の学習指導要領に記され、日常生活において必要であるにも拘らず、教科書記載がないため学習機会を得てこなかった「保有被服の有効活用や計画的な入手」の内容を女子大学生に実践させた。保有被服の有効活用や計画的入手を実行するには、まず、自己の手持ち服の数・種類をチェックし、過不足を把握した上で、コーディネートを検討した購入、及び適正な数量の保持・管理が必要である。この学習活動を含む課題の実践を通して、学生の気づき、意識変化を探り、教育内容・教育方法を検討することを本研究の目的とした。

### 2 研究方法

調査時期は2014年11~12月。調査対象はY女子大学3年生37名であった。

(1)事前に意識調査を行った。調査項目は、①衣類購入時の優先順位、衣類の選択・購入・管理に関する意識調査（20項目）【振り返り】、②自己の所持衣類の予測数【予測】である。

(2)家庭での実践課題を課した。内容は、①自己の所持衣類の数量チェック及び整理【モニタリング】、②所持衣類によるコーディネート【コントロール】、③整理・コーディネート実践の感想【気づき・内省】である。

(3)分析方法は、数値データをExcel2010及びSPSS22.0にて集計、分析し、実践後の感想（自由記述）は、同意味の単語・短文を集約し、実践後の意義・楽しさの表出有無との関連要因を探った。

### 3 研究結果

実践後の感想（自由記述）を抽出・集約した結果、12項目挙げた（%は全被験者に対する記述表出割合）。①「予想以上に所持衣類が多かった(32%)」、②「不使用衣類が多かった(35%)」、③「似たアイテムが多かった(35%)」等、予測数と実数の違いへの驚き、気づきが記されていた。また、⑤「購入前に所持品を把握すべき(22%)」、⑥「購入時、手持ち服とのコーディネートを考えるべき(22%)」、⑦「所持衣類をこまめに整理すべき(22%)」と、自己管理・調整的思考、及び計画的購入の必要性への気づき・内省が見られた。また、本実践課題に対する肯定的評価の有無と12項目の関連を分析した結果、⑪「少アイテムでも、多コーディネートが可能とわかった(22%)」、⑫「バリエーションを増やし、コーディネートを楽しみたい(27%)」の2項目に5%水準の有意差が認められた。このことから、本教材は「生活を振り返り、無意識を意識化することで、客観的見つめ直し（モニタリング）、気づき、内省を促し、主体的意思による行動（コントロール）の意義、楽しさを感じられる家庭での実践教材」と成りうると思う。本研究で明らかとなったように、「自己認識」は必ずしも「正しい状況把握」ではないことに気づき、内省し、改善策を思考する機会をもつ教育実践が、「真の生活的自立」につながっていくと考える。引き続き、生活で生かせ、生活から学ぶ教育内容・教育方法を模索していく。

## 中国の学校教育における家庭科的教育の現状

鳥取大学地域学研究科（院生） ○董婉婧  
鳥取大学 福田恵子

### 1. 研究目的

1980年代に始まった改革開放により、中国の経済が高度成長を遂げるに伴って、都市部と農村部の住民はともに豊かになった。その一方、教育や社会的・環境的問題はさらに深刻化している。特に、若者世代の生存力・社交力・忍耐力などが弱体化している傾向は教育と深く関係があると考えられる。そして、衣食住などに関する実践的・体験的な教育活動を通して、児童・生徒の基本的な生活能力及び良好な生活態度を養うこと、また、家庭生活を取り巻く環境への影響などを考慮しながら生活の質を高め、社会の調和を促進させていくことも重要な社会的課題である。中国大陸の小・中学校では「家庭科」という教科は設置されていないが、家庭科的な内容を含んでいる教科「総合実践活動」がある。本報告では、中国の学校教育における家庭科的教育の現状について明らかにする。

### 2. 研究方法

中国の家庭科的教育に関する課程「総合実践活動」に関する資料①『総合実践活動指導綱要（指導要領）』、②「総合実践活動」に関する先行研究、③「総合実践活動」に関する事例一をもとに、次の3点から研究を進める。まず、「総合実践活動」に関する先行研究を参考し、家庭科的教育を含む科目が設置される教育の背景を分析する。次に、『総合実践活動綱要（指導要領）』から家庭科的教育の内容・目標を明らかにする。特に、その目標を日本の「家庭科」の目標と比較する。そして、「総合実践活動」に関する事例を分析することにより、教育現場の家庭科的教育を具体化する。最後に、理論的な側面及び実践的な側面から中国学校における家庭科的教育の現状と効果及び課題についてまとめる。

### 3. 結果及び観察

高速経済成長を遂げると同時に格差問題を抱えている中国では、教育の面で「応試教育」から「素質教育」への改革に踏み入れた。学校教育において、2001年から家庭科的な内容を含んでいる「総合実践活動」が必修科目として設置された。

「総合実践活動」には、主に「研究的な学習」「地域サービスと社会実践」「労働と技術教育」「情報技術教育」という四つの学習領域がある。そのうち、家庭科的教育の内容を含むのは「労働と技術教育」である。「労働と技術教育」とは、児童・生徒が積極的に労働体験を行い、良好な技術素養などの多方面な発達を目標として、体験的な学習を特徴とする学習領域である。「労働と技術教育」は、主に技術初歩（技術基礎）、家政、職業事情などの内容から構成されている。各地域、各学校では、その実状によって上述した指定内容の中から具体項目を確定し、地域の特色のある技術学習内容を取り入れ、学年（発達段階）を考慮した教育内容となっている。

中国の各地の都市と農村において「総合実践活動」は、特に「労働と技術教育」に関しては多くの実践が行われている。今日においても、各地の経済格差が存在しているものの、各地の学校及び関連研究者は、特色ある「総合実践活動」の展開に努力している。例えば、中国の浙江省における嘉興市の小学校・中学校では「童心実践活動」「食糧を大切に、小さな光盤族（お皿に料理を残さない人）になろう」といった取り組みがなされている。

しかし、地域によって「総合実践活動」の実施には効果の差が存在している。如何に地域の実態に即して、今ある資源を活かし、地域ごとに異なった地域の課題に取り組む実践活動を実現することは現在の課題であり、現場教育者にとって重大な使命であるといえる。そのため、国でも地域でも更に力を合わせて取り組み、授業の改善を図ることが今後の課題といえる。

小学校家庭科におけるアクティブ・ラーニングを活用した食材を選ぶ力の育成  
—みそ汁づくりを題材にして—

○島根大学大学院教育学研究科 植田遥菜  
島根大学教育学部附属小学校 竹吉昭人  
島根大学教育学部 多々納道子

## I はじめに

食は我々が生きていく上で最も基本的な欲求の一つであり、生涯に渡って健全な心身を培い、豊かな人間性を育むために重要な生活領域である。それ故、食生活に関する学習は生涯教育における現代的課題である。加えて、学んだことを実際の生活に活用できるように、実践力を身に付けさせる工夫が重要である。他方、21世紀における最重要課題の一つである地球全体の環境保全や持続可能な社会の構築という観点から主体的に食生活を営むには、我々の生活を構成しているヒト、コト、モノを的確に選ぶ力の育成が求められる。そこで、小学校家庭科で指定題材となっているみそ汁づくりの学習を通して、食材を選ぶ力の育成をアクティブ・ラーニングによって身に付けさせることに着目し、その学習効果を明らかにすることとした。

この目的達成において考慮したことは、次のような点である。

みそ汁に入れる実を選ぶ視点を児童の話し合いによって深め、実際に買い物に出かけて購入し、それらの食材を用いて作り、試食する。このような体験学習によって、実感を伴った理解を深める。

## II 研究方法

1. 対象・・・島根県の小学校1校の5年生、2学級60人であった。
2. 時期と授業時数・・・平成26年11月~12月にかけての8時間。
3. 方法・・・みそ汁づくりの授業の前後にアンケート調査を実施するとともに、授業中の児童の学習行動を観察した。

## III 指導計画

アクティブ・ラーニングを活用した食材を選ぶ力の育成が目的であるため、第1次は児童相互の話し合いを中心とした活動を行い、学び合いによって食材選びの視点を決定した。この食材の代表例として、みそ汁の実の定番ともいえるとうふを2種類取り上げ、どちらを選ぶのかを考えさせた。第2次では、第1次で得た知識を活用して、みそ汁の実にする食材を児童が実際に購入し、調理実習を行なった。これらの体験で得た学びから、食材選びの視点をさらに深めるとともに、環境保全に配慮し、おいしいみそ汁を作るといったものであった。

## IV 結果と考察

1. 2種類のとうふの中から自分はどちらを選ぶのかについて、児童相互の話し合いによって決めさせたところ、授業前後ではその割合と理由とも大きく変化した。すなわち、授業前には地元で製造され、手づくり風な外見であるとうふに82.1%のものが集中した。話し合いによる学び合いの後には、値段や賞味期限なども選ぶ視点としており、選んだとうふも各児童の目的に合わせたものとなった。
2. 食材選びの意欲は授業前後で変化があり、授業後には意欲を持つものが程度の差はあれ、かなり増加した。また、「いつも決まった視点を大切に、食材を選ぶ」というものが授業後には減少し、代わって「その時々で大切だと思う視点の中から、合った食材を選ぶ」という割合が増加した。
3. 食材選びの具体的な視点の数は増加し、授業後には5.7から7.9になった。従って目的に合う視点を多面的に選択できるようになったことが分かった。
4. さらに食材を選んだ理由を自由記述で求め、トレンドサーチによる内容分析を行ったところ、授業前には生産地と値段によるグループの結びつきが強かった。それが授業後には、安全・安心とおいしいという2つのグループを形成した。また、余る、もったいないという用語に関連して、量についても言及していたことから、実際のみそ汁づくりで多くの材料で、沢山のみそ汁を作ったことが影響しており、環境意識を喚起するものとなった。

以上のように、本学習によって食材を選ぶ力が育成されたものと考えられる。

## 「比較」を通して実践力を育む小学校家庭科授業の実践

山口大学教育学部附属山口小学校 古庄 又

### 1. 研究目的

家庭科で目指している「実践的な態度を養う」ためには、学習の中で得た知識や技能を「生活の中で生かしたい」という思いをもつことができるように、自らの生活を見つめ直すことが必要である。しかし、子どもたちはこれまで、自らの生活を当たり前のこととして過ごしてきたため、見つめ直すことは容易ではない。そこで、授業の中において、子ども自らが「自分の生活と仲間の生活」「これまでの自分の取り組みと活動から得た知識・技能」「学習前と後の自分自身」とを「比較」する場を仕組むことが、自らの生活を客観的に見つめ直すことにつながると考えた。そこで、「仲間との比較」「活動との比較」「自分自身の比較」の場を効果的に仕組んだ家庭科授業を実践し、子どもの気付きを追うことで、実践的な態度が養われることを明らかにしていきたい。

### 2. 研究方法

小学校5年生(男子17名、女子17名、計34名)を対象に、「暖かい着方の工夫(全7時間)」の実践を行う。その際、以下のような「比較」の場面を仕組む。

- ① 「暖かく過ごせる」ように自分で服を選んで持ちより、衣服内の温度を測り、グラフ化することで仲間と比較し、着方について交流する。
  - ② ミトン状の布を服に見立て、服の枚数・服の厚さ・服の形を変えて、温度を比較する。そこでの気付きをもとに、自分の着方と比較する。
  - ③ ①の活動を題材の導入と終末に行い、自分の暖かい着方について比較する。
- 授業ごとの子どもの気付き・ふりかえりをもとに、成果について考察していく。

### 3. 結果と考察

導入では、服を持ち寄り、自分が暖かいと感じている温度が何度であるのかを調べ、体感と温度を軸にした表にまとめた。仲間と着方について交流する中で「Aさんのように服の形は意識していなかったな」と自分の着方を見つめ直す姿が見られた。また、着方を整理していく中で、子どもたちは「服の枚数」「服の厚さ」「服の形」といった暖かい着方の工夫の視点を見出した。そのようにして見出した工夫の視点をもとに、体に見立てた手に布をかぶせ、温度を測る実験に取り組んだ。「服の枚数」「服の厚さ」「服の形」といった条件を変え、温度を比較する中で「何枚も重ねた方が暖かい感じがするな。温度を測ると、重ね着の方が3度も高かった」など、感じ方と温度を結びつけながら、見出した工夫が効果的であることに気付くことができた。また、手に布をかぶせて実験を行ったことで「裾を開いていると、中の空気がすうっとする」と子どもたちは服の中の空気の存在に気付き、そのことが「暖かい着方は、中の空気を暖めて逃がさないようにすることだ」という衣服の働きを見出すことにつながった。

見出したことをもとに、家から服を持ち寄り温度を測る活動を再度仕組んだことで、自分の工夫が効果的であったことに気付いていった。取り組んだ工夫についての交流では「僕は今まで首元を意識していなかったから、Bさんのように、ハイネックを着て暖かくしたいと思ったよ」「Cさんのように脱ぎ着しやすい服を羽織るようにしたら、暑い時にすぐに脱げるね」など、自分の着方を見つめ直し、仲間の暖かい着方を自分の着方に取り入れようとする姿が見られた。

学習後の子どもたちの学びの姿として、休日にどのように工夫した服装で過ごしたかをまとめる姿も見られ、実践的な態度を養うこともできたと考えられる。

しかし、着方の工夫の交流では、温度と関係付けて語ろうとしなかった子どもがいるのも事実である。実験の際の材の選択、条件制御に課題があったのではないかと考える。変化が分かりやすく身近な材、焦点化した条件制御が必要であった。

## <講演要旨>

**演題：人をつなぐおもちゃ**

**講師：多田千尋氏（芸術教育研究所長、東京おもちゃ美術館館長）**

### 仕事（自己紹介）

早稲田大学で「福祉文化論」という授業を、お茶の水女子大学では「コミュニティ保育資源の活用」という授業などを行っていること、JICAでも長期にわたって講師を引き受けていること、また、文部科学省の学習指導要領解説技術・家庭科作成協力者として加わったこともあり、その場では「ヒューマンケア」の大切さを主張したことが話されました。

芸術教育研究所（多田氏の父親がつくられた）に27歳で入り、34歳から代表を務めているという経歴や、アメリカなどでは様々な所に配置されているが、日本ではあまり知られていない「アクティビティディレクター」（老人ホームを楽しくするなど、楽しい場をつくる専門家）を5000人養成する計画に取り組んでいること、そして、木育推進・多世代交流の館として東京おもちゃ美術館を運営していることが自己紹介されました。

### おもちゃのもつ力

実際に持ってこられたおもちゃを使って、それがどんな効果をもたらすかを示されました。音（ホイッスル）が鳴るおもちゃを老人ホームで試したところ、高齢者の顔に生気が表れるといった変化が生じた。たたくと様々な音が出る木のおもちゃでは老人ホームの入居者が踊りだした、しかもこれまで上がらなかった高さまで手を上げて踊ったなど、おもちゃが高齢者の何かを刺激して「化学反応」をおこすことが話されました。別のおもちゃを二人で使って遊ぶと、初対面の人でも協力しあい、人と人がつながりあう。人と人とのコミュニケーションも育む。おもちゃは人と人とのつながりの接着剤であり、生活道具だと言われました。

次に郷土玩具について触れられました。日本は郷土玩具大国で、しかも長い歴史があります。江戸時代に作られた竹かごに入った犬のおもちゃが示され、犬と竹で笑いを表現したものであることが説明されました。江戸時代のおもちゃは大人の願いごと、子どもへの期待を込めたメッセージトイ（Toy）だそうです。日本の風車（かざぐるま）のルーツでは、羽根は6枚あり、それぞれの羽根に米俵の絵が描かれていたそうです。これは、6つの米俵で6俵（むびょう）を、すなわち、子どもの無病息災を願ったものだそうです。当時は多産多死の時代で、子どもが3歳までに亡くなることが多く、親は子供の健康を願い、子どもに風車を持たせたようです。当時のおもちゃには、このような「健康グッズ」と言えるものが7～8割ぐらいと多かったそうです。ちなみに、破魔矢を七五三の時に持たせたのも同じ意味で、大人のメッセージがおもちゃに込められていたことをこのような事例を通して語られました。

### ヒューマンケアと東京おもちゃ美術館

まず、ヒューマンケアには2つの栄養が必要だと説明されました。1つは、身体の栄養であり、もう1つは心の栄養で、こちらはあまり考えられていないが、心の栄養の専門家を目指したいと述べられました。そして、心の栄養を追求できる美術館として、東京おもちゃ美術館のことが紹介されました。

## ■□■〈研究室だより〉■□■□■

鳥取大学地域学部 福田 恵子

鳥取大学地域学部は、1999年に教育学部から教育地域科学部へ、2004年に現在の地域学部へと改組され、「地域学」という学際的な理論を構築し、地域の公共的な課題を環境、文化、教育および政策の4つの視点から教育・研究する学部です。設置からすでに10年がすぎ、近年、全国に地域学系の学部や学科が新たにできていますが、その一步先行く学部として成果が問われています。

地域学部では、地域に密着したフィールドワークを重視しています。特に2年次では、1年間かけて地域調査を行い、調査・研究のスキルを身につけることはもちろんのこと、人々の暮らしを見つめ、課題を把握し、実際の生活に寄り添いながら課題解決に向かう姿勢を育てます。地域学部では、家庭科の教員免許を取得することはできませんが、もし、取得できるとしたならば、家庭科での学びと自らの生活と地域社会を結びつけることのできる実践力のある家庭科教員を育てられるのになあと思わないではいられません。ここでは、地域調査実習での学生の取り組みについてご紹介します。

下記は、ここ近年の調査内容です。

2012年：高齢者の食と健康に関する調査

2013年：高齢者の生き甲斐（心の健康）調査

2014年：消えゆく地域資源を記録するⅠ(DVD制作)

2015年：消えゆく地域資源を記録するⅡ(DVD制作)

調査内容からおわかりかと思いますが、調査フィールドとしてお世話になっている地域は、山間部の高齢化率が5割を越える限界集落です。2012年度は、高齢者の方々の身体測定と栄養状態の調査のほか、日々の楽しみを聞き取りしました（↑上写真）。その結果、高齢者の身体能力や栄養状態は心の健康と関わっていることがわかりました。殊に、この地域では80歳の男性のほとんどが自動車を運転されていますが、運転をあきらめることで楽しみが減少し、栄養状態も悪くなり、足腰も弱るといった悪循環に陥ることもわかりました。この調査結果を受けて、2013年度は、高齢者の方々の生き甲斐について聞き取り調査を行いました。そこで明らかになったことは、行政の高齢者政策でよく行われている「生き甲斐を持ちましょう！」という取り組みからこぼれ落ちる人々—すでに生き甲斐をもつ気力もない人々—が実際には少なくないこと、しかし、学生達に自分の人生について語り、若者の未来に夢を馳せることそのものが楽しみや生き甲斐になりうることへの気づきが得られました。それ受け、2014年と2015年度（右写真→）は、高齢者のもっておられる昔の生活文化や知識・スキルを伺いながら、地域資源として記録し、高齢者も学生も地域に貢献する喜びや達成感を得られる取り組みを行っています。



\*\*\*<学校現場から>\*\*\*

## 仲間とのかかわりで自らの生活を見つめ直す家庭科学習

～5年「あたたかい着方を工夫しよう」より～

山口大学教育学部附属山口小学校 古 庄 又

\*\*\*\*\*

本校では、毎年11月下旬～12月上旬に研究発表大会を開催し、授業を公開するとともに1年間の研究の成果を問うています。昨年度より、「仲間と関わり合いながら自らの生活をよりよくしようとする子どもを育む家庭科学習」をテーマに掲げ、研究を推進して2年目になります。そうした中で、「仲間とのかかわりで、自らの生活を客観的に見つめ直す支援の工夫」に焦点を当てて行った実践について紹介します。

### 1 はじめに

家庭科でめざしている「実践的な態度を養う」ためには、自らの生活を見つめ直し、学習の中で得た知識や技能を「生活の中で生かしたい」という思いをもつことが大切です。しかし、子どもたちはこれまで、自らの生活を当たり前と思って過ごしてきたため、見つめ直すことは容易ではありません。そこで、仲間とのかかわり合いを充実させることが、自らの生活を客観的に見つめ直すことにつながると考えました。なぜなら、家族構成や食生活の傾向、住環境など、生活の様式は一人ひとり違いがあり、そのような多様な仲間の生活に触れることで、自分の生活と仲間の生活とを比較することができるからです。

### 2 実践事例「あたたかい着方を工夫しよう」

本題材では、暖かい着方について調べたり、分かったことや考えたことを交流したりし、寒い季節に応じた、暖かい着方の工夫を見出すことができるようにすることをねらいとしました。

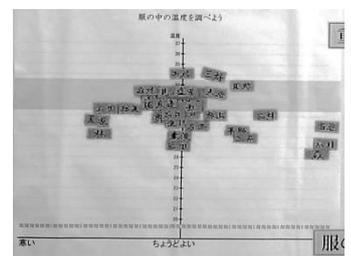
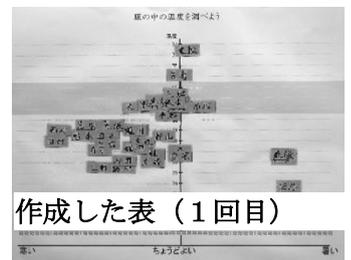
導入では、暖かく快適に過ごすための着方をそれぞれで考え、服を持ち寄りました。持ち寄った服を着て、自分が暖かいと感じている温度が何度であるのかを調べ、体感と温度を軸にした表にまとめました。その際、衣料メーカーの東洋紡の「衣服内気候の快適域」のデータをもとに、一般的に「快適」と言われる衣服内の温度を「31℃～3℃」と設定しました。その後、子どもたちの着方と温度を比較しながら、「服の枚数(重ね着)」「服の厚さ」「服の形」に工夫の視点を置き、それぞれの効果について、手袋状の布を用いて、皮革実験を行いました。

さらに、題材の終末で、もう一度暖かく快適に過ごすための服を考えて持ち寄り、温度を測りました。すると、ほとんどの子どもたちが「1回目より暖かくなっている」とその効果を感じ、自分の着方の工夫について交流しました。

このように、仲間と比較しながら着方の工夫を見出し、実際にその着方の工夫の良さを感じたことで、子どもたちは、日常での服の着方を意識するようになりました。

### 3 題材を振り返って

仲間の取り組みと比較することで、子どもたちはこれまでの自分の意識になかった取り組みに目を向け、その良さを感じることができるようになりました。しかし、題材の導入での課題意識のたたせ方に課題があると感じました。今後は、生活の中により切実な課題を見いだせるような支援のあり方を研究していきたいと思えます。



---

## 2015年度 日本家庭科教育学会本部だより

---

2015（平成27）年12月12日（土）に、東京学芸大学で「日本家庭科教育学会2015（平成27）年度例会」が開催され、例会終了後、「2015年度第2回地区会代表者会議」がありました。協議事項を以下に記します。

1. 地区会の会計年度について  
会計年度が異なっている地区が2, 3あるが、本部への会計報告は4月～3月末でお願いしたいとのこと。
2. 各地区の共同研究の進め方について  
各地区から現状を報告。毎年冊子を作っている地区、個人研究に資金を補助している地区、VTR教材を作成し会員へ配付している地区、行っていない地区等様々。活発化する方策を練っていく方針が確認された。中国地区は、担当者からテーマをだし、総会で決定して研究者を募っていること、3年ごとに冊子を作成していること、その経費を積み立てしていることを報告した。
3. 学会ホームページの地区会ページの情報更新について  
8月末までに掲載変更事項を事務局に連絡してほしい（役員交代など）。更新回数は契約上、各地区年1回。6月総会後に地区会の申し出により変更。今後あり方を検討する。
4. 学会課題研究について（研究推進より）  
4つの分科会に分かれて推進中。例会で中間報告がなされた。  
＜テーマ1＞グローバル化と家庭科
  - ・分科会1-1 外国につながるの小学校児童の現状と家庭科の課題
  - ・分科会1-2 グローバルな視野で世界の家庭科をつなぐ  
ーレッスン・スタディを中心とした日本からの発信と交流ー
  - ・分科会1-3 グローバルな視点を導入した家庭科カリキュラム＜テーマ2＞貧困と向き合う家庭科
  - ・分科会2 貧困と向き合う家庭科ー高等学校の取り組みを中心にー○記録は学会誌に掲載。最終報告は、来年度の例会を予定。
5. 2015年度3月セミナーについて（研究推進より）  
2016年3月26日（土）13:30～16:30 キャンパスイノベーションセンター  
テーマ「コラボレイティング・ラーニング（協調学習）」～知識構成型ジグソー法  
講師 森田智幸氏（山形大学）
6. 論文のWeb投稿について（編集より）  
郵送からWeb投稿に変更する。移行期を1年くらい予定している。投稿料が8,000円から4,000～5,000円となる見込み。
7. 全国大会開催の輪番について  
2016年度：北陸地区      2017年度：理事会（60周年）      2018年度：関東地区  
2019年度：東海地区      2020年度：北海道地区      2021年度：近畿地区
8. 地区代表者会議の運営について  
2015年度：九州地区      2016年度：東北地区      2017年度：中国地区  
2018年度：四国地区      2019年度：北陸地区      2020年度：関東地区
9. その他  
2017年8月6～10日 ARAHE（アジア地区の国際会議）代々木オリンピックセンター  
2017年6月25日 60周年記念大会

（西敦子）

## 基 調 講 演

### 「ディープ・アクティブラーニングの提案」

講師 松下佳代氏

(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

#### 【主なご著書】

- 『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房（2015年）  
『〈新しい能力〉は教育を変えるか？—学力・リテラシー・コンピテンシー—』ミネルヴァ書房（2010年）  
『パフォーマンス評価』日本標準（2007年）

\*基調講演の後、実践報告を交えたディスカッション  
で具体的に検討し学び合える、実り多い講演会です！



期日 2016年8月20日(土)

■ I 研究発表 12:45~13:45

■ II 講演会 14:00~15:40

- ・基調講演 14:00~15:10・・・松下佳代氏（京都大学）
- ・実践報告 15:10~15:25・・・西垣充子氏（鳥取市湖東中学校）
- ・ディスカッション~15:40

■ III 総会 15:50~16:20

会場 鳥取大学地域学部 2450 講義室

\*\*\*\*\*

\* 研究発表の申込みは、同封の申込用紙にてお願いいたします。尚、プログラムや講演等の詳細については、研究発表の申し込み締め切り後に発送いたします。

## 事務局だより

<新入会員> (敬称略)

(山口県) 藤井美香 (岡山県) 三宅元子

<退会会員> (敬称略)

(広島県) 望月てる代, 下窪美咲, 高畑律子, 三好由佳

### 1. 会報執筆について

	〈学校現場より〉	〈研究室だより〉
37号 (平成28年度)	鳥取	島根
38号 (平成29年度)	島根	岡山
39号 (平成30年度)	岡山	広島
40号 (平成31年度)	広島	山口
41号 (平成32年度)	山口	鳥取

### 2. 地区会費の納入のお願い

地区会費の納入状況についてのお知らせを同封しています。2016年度の地区会費とともに未納分の地区会費を下記の口座に納入して下さいますよう、お願いいたします。

未納期間が3年を超えますと、自動退会となりますので、ご注意ください。

お知らせの入っていない方は、2016年度まで地区会費が納入済です。

#### 【地区会費】

銀行口座	トマト銀行 野田支店 普通預金
振替口座番号	1660032
加入者名	日本家庭科教育学会中国地区会
年会費	1,000円
入会金	不要

#### 【入会申し込み方法】

下記事務局までお問い合わせ下さい。

### 3. 事務局連絡先

住所・勤務先の変更などがございましたら、事務局までお知らせ下さい。

〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1 岡山大学教育学部

TEL : (088) 251-7675 E-mail : sw20@okayama-u.ac.jp

### 《編集後記》

会報第36号をお届けいたします。会報の発行に当たりまして、年度末のお忙しい中、ご執筆くださいました福田恵子先生、西 敦子先生、古庄 又先生に深く感謝申し上げます。今年度は、地区会事務局が交替になりました。これから2年間よろしくお願いいたします。皆様のご協力、何卒よろしくお願いいたします。引き継ぎにあたり、前任の先生方が大変丁寧に資料をまとめてくださいました。お礼申し上げます。今年度は、新しい共同研究が始まりました。8月の中国地区会では、多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。(篠原陽子)

2016年3月1日

日本家庭科教育学会中国地区会会員 各位

学会事務局

## 第36回 研究発表会・講演会・総会のご案内

会報に記載されておりますように、2016年8月20日（土）鳥取大学地域学部におきまして、標記の会を開催いたします。

つきましては、研究発表を希望される方は、研究発表申込書（切り取り線以下）に、必要事項をご記入の上、5月31日までに下記までお送りください。

【送付先】〒680-8550 鳥取市湖山町南4丁目101番地

鳥取大学地域学部 福田恵子

(TEL : 0857-31-5136, E-mail : k-fukuda@rs.tottori-u.ac.jp)

\*\*\*\*\* 切り取り線 \*\*\*\*\*

発表者・所属 (演者には○印)		
発表題目		
パワーポイント 使用の有無 (○で囲む)	使用する	・ 使用しない
発表者の連絡先	電話番号	メールアドレス